

身延文庫

『法華遊意』木版本の書誌研究

慶北大學校社會科學大學文獻情報學科

南

權熙

目次

一 緒言	3
二 『法華遊意』の物理的形態と傳來経緯	4
1. 形態書誌	4
2. 傳來	5
三 著者吉藏の生涯と著述	7
1. 生涯と思想	7
2. 著述	9
四 『法華遊意』の體制と特徴	11
1. 體制と内容	11
2. 『法華遊意』の内容構成	13
3. 関連註釋書と引用文献	19
五 法華經の成立と『法華遊意』の版本	20
1. 法華經と翻譯書の成立	20
2. 『法華遊意』の版本	23
六 身延文庫本『法華遊意』の原文對照と特徴	27
1. 文字の異同・誤脱・倒置・省略	27
2. 文章の脱文・衍文と異體字	29
七 結言	30

一 緒 言

この研究では、三論宗という名前で広く知られている吉藏と彼の代表的な著述の一つである『法華遊意』に対して書誌的に検討する。特に身延山久遠寺の身延文庫に所藏された十三世紀木版本を対象に本の形態と構成を含め内容を他の版本と比較して、その差異を明らかにする。そして、すでに大正新修大藏經第三十四卷に収録された内容と比較しその特徴を明確にする。

この本の内容と思想的な研究については、すでにいくつかの研究がある。例えば、法華經の複数註釋書だけでなく、『法華遊意』の譯註まで検討した丸山孝雄¹の研究と吉藏以前の法華經註釋書を含め、吉藏が書いた複数の法華經註釋書と教判思想を扱った菅野博史²の研究がある。さらに、彼はいくつかの註釋書の中で『法華遊意』だけを分析し、内包された思想と中国での法華經に対する解釈についても、『法華とは何か』³で詳しく述べている。

そして、平井俊榮⁴は、同じ吉藏の『法華玄論』に対する研究で中國の般若思想史研究の観点から三論學中心の法華經諸疏を扱った。これに加え、中国における法華經の研究史に関する坂本幸男を含め約二十名の論考をまとめた『法華經の中國的展開・法華經研究』⁵という本がある。その本では複数の法華經註釋書に対して検討しており、里見泰穩は吉藏の法華經玄論について、丸山孝雄は法華義疏について研究を行った。

このように、『法華遊意』に対する本格的な研究は主に日本で行われており、韓國では吉藏の法華經觀を扱った文海淑(聲寶)⁶の研究が

- 1 丸山孝雄、法華教學研究序説。吉藏における受容と展開(東京・平樂寺書店、一九七八) 譯註部分：pp.407-523
- 2 史菅野博史、中國法華思想の研究(東京・春秋社、一九九四)
- 3 菅野博史、法華とは何か。法華遊意を讀む(東京・春秋社、一九九四)
- 4 平井俊榮、法華玄論の註釋的研究(東京・春秋社、一九八七)
- 5 平井俊榮、中國般若思想史研究・吉藏と三論學派(東京・春秋社、一九七六)
- 6 坂本幸男編、法華經の中國的展開・法華經研究(東京・平樂寺書店、一九七二)
- 7 文海淑(聲寶)、「吉藏の法華經觀研究」、碩士學位論文、東国大学校大学院、一九九九

あり、吉藏の三論思想に対しては韓明淑⁷の研究がある。そして、吉藏の大乗玄論を中心とした沈鍾澤⁸の研究と、法華注意を対象に翻訳し論文を書いたナムリユン僧侶と、このプロセスに参加した車次錫が共同編譯に出版した譯註本⁹もある。

しかし、その以外には、それぞれの注釈書を中心にし吉藏の生涯あるいは彼の思想を扱った研究と、中心思想だけを幾つかの側面から検討した研究が多い。

その結果、吉藏の法華經觀は『法華玄論』十卷から始まり『法華義疏』に至って確立され、『法華遊意』ではそれ以前の思想を體系的に整理しており、一番最後に出た『法華統略』では新しい發展はないが、新たな構想によって敘述の深化がなされたと見なすことができるため、その過程で『法華遊意』が持つ意味が検討された。

このような研究にもかかわらず、中國と韓國では伝われる版本がないため、底本と版本との比較は言うまでもなく、伝来の過程を推論するのも難しい。

二 『法華遊意』の物理的形態と傳來經緯

1. 形態 書誌

冊の表紙に墨書で「法華遊意」という題目を書いて、その下に一冊で完結された意味で、「完」という表示をした。右側下段にも同じに、墨書で「身延本院」という所藏者の表示を書いて置いた。

表紙は、別途の装訂をせず、本文と同じ紙を使用しており、糸で編綴したものではなく、糊で付けた「粘葉装」の形態である。保存の状態は良くなく、四邊と角が毀損したり、虫害を受けたりした部分が多い。

本文の形態は、木版で刻んだものであるが、邊欄がなく、行間の界線もない。一面は七行二十字の配列であり、後代人による墨書の訓讀がカナで表示されている。文字の書体は、整齊された歐體風の楷書で底本を作成したものであると思われる。

全体の張数は中の数字の表示によって巻末部分まで四十三張と最後の一面であるが、本の後半部の一部、すなわち第三十九張三面から第四十一張三面まで、四十三張一面などにおいて張次の順序が間違っていて編綴した状態である。しかし、順序を合わせて再編綴し対照してみると、内容上欠落がない。

本文の中で異體字が多少含まれており、略體も頻繁に使用された。現存する版本の中では全體十門の中の第一―三門を巻上、第四―十門を巻下として区分し製冊も分離した版本が伝わっている。

2. 傳 來

鳩摩羅什が翻訳した『妙法蓮華經』の分量は、吉藏の以前には七巻であったが、以後には八巻本が流通されるようになった。主な意味は、方便の門を開くことと、眞實な意味を明らかにすることであり、人間の本性は静かで理は言語を超越しているため、微妙（妙）して衆生のために法という規範を作成し、道に比喻する形像を連花によって表現したのが「妙法蓮華經」という題目である。

この法華經が持っている意味を十門に区分し説明しており、その具体的な表現は問と答という形式をとっている。

この『法華遊意』が東北亞でどのような過程で伝わったのかは、現在までの記録では知ることができないが、高麗の義天が編纂した『新編諸宗教藏總錄』では、上巻の法華經項目で「遊意一卷吉藏述」という記録があり、同じ項目で吉藏が書いた「疏十二卷、玄論十卷」の二種についても収録されている。この法華經の註釋書と關聯した義天の記録のうち、彼の文集である『大覺國師文集』外集卷第二に、淨源法師から受け取った書信の中で「法華經疏はすでに受け取っており、僧叡法師の疏は、他の日に見ることができると、送っていた」と、幸せと存じます」という内容から見て、すでに法華經や關連した註釋書などが教藏の體制で刊行された事実を間接的に確認することができる。

7 韓明淑、「吉藏의 三論思想研究」、博士學位論文、高麗大学大学院、二〇〇二

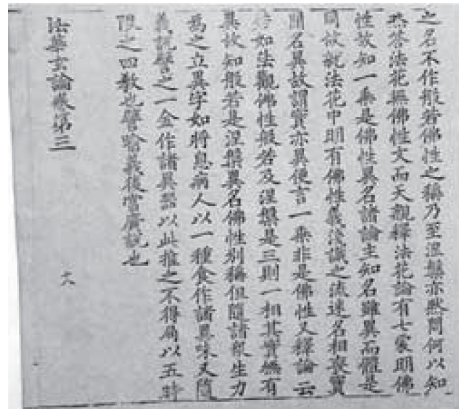
8 沈鍾澤、「吉藏의 大乘玄論研究」、博士學位論文、東国大学校大学院、二〇〇九

9 車次錫、甘昇 共編譯、『譯註法華遊意』（서울:우리出版社、二〇一七）

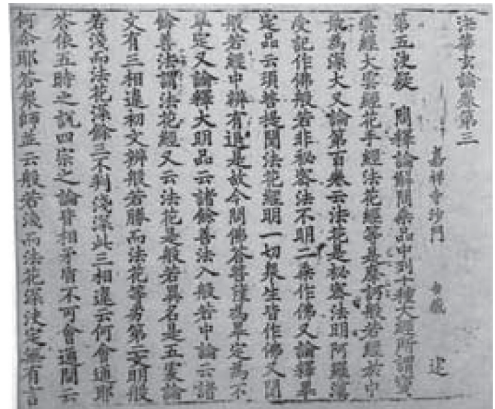
これに加え、韓国で最近発見された『法華玄論』巻第三―四は教藏の形式的體制と書體を持つているが、教藏の高麗刊本ではなく、朝鮮時代の刊經都監で翻刻重修した木版本である。

この本の著者表示は「嘉祥寺沙門吉藏述」であり、巻末の底本刊行記録は「乾統二年壬午歲高麗國大興王寺奉／宣雕造」である。続いて、底本を筆寫した書寫者については「寫經院書者臣韓惟翼書」と記録されている。この時期は高麗肅宗七年（一一〇二）であり、現在までに確認された教藏の刊記の中で最も遅い時期に当てはまる。これと同じ時期と形態の刊記を持つ『藥師琉璃光如來本願功德經』が韓国の韓國學中央研究院に所藏されている。

この『法華玄論』巻三、四の内容を『大正新修大藏經第三十四冊』と比較してみると、巻三では巻二に続いて「第五決疑」で始まり、『法華遊意』と同様に問答の形式である。巻四の内容は、「第六隨文釋義」で構成されている。高麗教藏本と大正新修大藏經を比較すると、異なる文字があったり、省略されたりする部分が見られる。



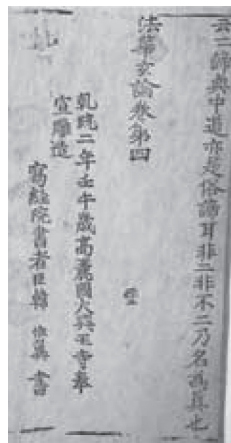
『法華玄論』巻3 卷末題面



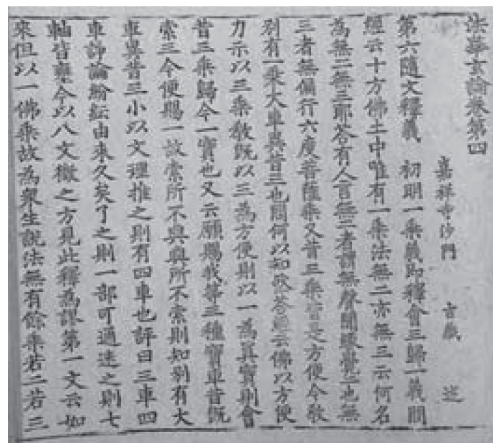
『法華玄論』巻3 卷首題面



『法華玄論』巻3 重修刊記



巻4 底本刊記



『法華玄論』巻4 卷首題面

三 著者吉藏の生涯と著述

1. 生涯と思想

『續高僧傳』では、吉藏（五四九―六二三）が三論を講義したことが一百遍であり、法華は三百遍、大品、智論、華嚴、維摩はそれぞれ數十遍になり、これらに関する玄疏を著述したのも世上に流布されたと書かれている。この中で現存する著述は平井俊榮¹⁰によると、二十六部百十二卷であり、經錄には記載されているが、寫本や刊本という形で存在し大藏經に包含されていないものもある。

このように、一生涯ずっと活発な著述活動を行った吉藏の姓は安氏で安息（南アジアパルティア）出身であり、「胡吉藏」という彼の名前からわかるように西洋人の姿で表現されている。祖父の時、廣東省南海に移住した後、ベトナムのハノイ地域である交州と廣東省廣州を経て金陵に移った頃吉藏が生まれた。彼の父も出家して道諒という法名の修行僧であり、五四八―五四九年の間眞諦三藏（四九九―五六九）が金陵に滞在する際、息子を連れて行って吉藏という名前を受けた。その後吉藏は道諒とともに興皇寺法朗の説法を聞き、十一歳の時三論をよく知っていた法朗に出家した。十九歳になつては大衆に講義を行うなど、この時期から世に知られるようになった。

二十一歳に具足戒を受け陳の桂陽王に佛法を教えており、隋代には四十一歳になつた五八九年から七十八年間會稽の嘉祥寺で主席を行った。この時期著述した冊九種の中で時期が正確なのは五九五年の『大品經義疏』十卷であり、残りの八種の疏は『涅槃經遊意』¹¹、『大品遊意』、『維摩經義疏』、『法華義疏』、『金剛般若疏』、『二諦義』¹²、『勝鬘寶窟』、『法華玄論』などである。

嘉祥寺に滞在する前、吉藏は大衆と一緒に捨てられた寺利を見つけ出し、所藏されていた文疏を収集し三間の建物に保存した。そして、混亂期が終わつた後、これを研究し自分の注疏に広く引用した。

10 平井俊榮、中國般若思想史研究（東京：春秋社、一九七六）p.355

11 大正新修大藏經、第三十八卷

12 大正新修大藏經、第四十五卷

さらに、彼の年齢が四十九―五十一歳であった五九七―五九九年には、晉王廣の招請で揚州の慧日道場で撰述した『三論玄義』¹³では「慧日道場沙門吉藏奉命撰」と述べており、『勝鬘寶窟』六卷（または三卷上下）と『華嚴經遊意』一卷では「慧日道場沙門釋吉藏撰」と書いた。彼は慧日道場で約二年間過ごした後、長安の日嚴寺に移った。

吉藏の年齢が五十一歳頃である五九九年には、晉王廣が中原に佛教を振興させるため、彼を長安の日嚴寺に移るようにした。そこで大乘經典の註釋に力を注いだ結果、最初は『淨名玄論』八卷を著述した。そして、隋代の文帝の時代である開皇末年（六〇〇）彼は病になつたにも関わらず、『維摩經義疏』卷一の「玄章」を書き、同じ文帝の時期である仁壽末年（六〇四）には、皇帝の命に従いお互いに異なる二つの文疏の本を作り、百尺の大佛像も造成した。

六〇五年には二千部の法華經を筆寫しており、二十五尊像と普賢菩薩像を安置し坐禪をしながら、實相の真理を悟ろうとした。六〇九年には隋の齊王暕が主催した討論で僧粲（五二九―六一三）と問答を行った。

その時期は吉藏の生涯において思想的に完城された時期であり、著述としては『淨名玄論』、『維摩經略疏』、『維摩經遊意』、『涅槃經遊意』¹⁴、『仁王般若經疏』、『觀無量壽經義疏』、『金光明經疏』、『十二門論疏』、『中觀疏』、『百論疏』、『法華論疏』、『法華經統略』、『法華遊意』などがある。

このように、出嫁した後、吉藏は地域を移りながら經典を研究しており、講論だけではなく、様々な經典に対する註釋も行い著述にも力を入れた。そのことは前で述べた時期別の著述外にも『大乘玄論』などにもよく現れている。特に、吉藏は三論と法華經の研究に力を入れており、現存する彼の著述の中で法華諸疏が約三分の一を占めている。

唐代に入った六一八年彼は十大徳の一人に選ばれており、實際寺と定水寺を経て延興寺に居住した。その後の事については、七十五歳になった六二三年五月に「死不怖論」を作った後、入寂したということが『續高僧傳』に記録されている。

一方、上で述べた吉藏の生涯を通じて作られた彼の思想と系譜についてはいろんな説があることも事実である。しかし、石井公成¹⁵は吉藏と同時代に八宿の弟子に修学した事実を慧均の『大乘四論玄義』から見つかっており、朴商洙¹⁶も僧朗が周顒を教えながら『四種論』を著述したという記録と『大乘四論玄義』の逸文を発見した。彼はそれをもとにし、三論學の系譜を「鳩摩羅什↓道生↓曇濟↓僧朗↓僧詮↓法朗↓吉藏」という形でまとめており、僧朗の師承については従來の系譜説を収容し「鳩摩羅什↓道生↓曇濟↓僧朗」であるこ

とを三論原流系譜という図表で提示した。

2. 著述

吉藏が撰述した著作は、『大乘玄論』をはじめ、約二十六部百十二卷として知られている。彼は当時最高の仏教学者として呼ばれており、具体的書名は以下の通りである。

(1)	華嚴遊意	一卷	(2)	淨名玄論	八卷	(3)	維摩經義疏	六卷
(4)	維摩經遊意	一卷	(5)	維摩經略疏	五卷	(6)	勝鬘經窟	六卷
(7)	金光明經疏	一卷	(8)	無量壽經義疏	一卷	(9)	觀無量壽經義疏	一卷
(10)	彌勒經遊意	一卷	(11)	大品遊意	一卷	(12)	大品經義疏	十卷
(13)	金剛般若疏	四卷	(14)	仁王般若經疏	六卷	(15)	法華玄論	十卷
(16)	法華義疏	十二卷	(17)	法華遊意	一卷	(18)	法華經統略	六卷
(19)	法華論疏	三卷	(20)	三論玄義 ¹⁷	一卷	(21)	中觀論疏	十卷
(22)	十二門論疏	三卷	(23)	涅槃經遊意	一卷	(24)	百論疏	三卷
(25)	二諦義	三卷	(26)	大乘玄論	五卷			

- 13 大正新修大藏經、第七十卷
 14 大正新修大藏經、第三十八卷
 15 石井公成、朝鮮佛教における三論教學、三論教學の研究（東京：春秋社、一九九〇）p.460
 16 吉藏著、朴商洙訳、삼론현의 (三論玄義) (서울: 소명출판, 二〇〇九) pp.47-49
 17 上掲書

上の本の中で法華經に関するものは法華玄論十卷、法華義疏十二卷、法華遊意一卷、法華統略六卷である。ここに妙法蓮華經優婆提舍（法華論）¹⁸の注釈書である法華論疏三卷を加えることもできる。

『法華玄論』は吉藏が會稽嘉祥寺に泊まった時に書いたものであり、弘經方法、大意、釋名立宗、決疑の體系で構成されている。特にここでは、法華經に対して解釋を行う際念頭におかなければならない中心になる思想や概念と重要な文章について解釋を行った。この分析システムは、法華義疏にもつながっている。法華經を分科した後、それに従って、經文を解釈したり、提起された問題を説明したりした。次の段階で撰述された『法華遊意』は、『法華玄論』十卷と『法華義疏』十二卷で述べた詳細な内容を簡略して体系的に整理したものである。このような研究とまとめを通じて導出された情報である「妙法蓮華經」という經題に対する説明と、主要語句と文章に対する吉藏自身の見解と解釋を合わせて完成したのが『法華統略』である。

現在まで内容が知られているのは二十六部であるが、先行研究等では逸失されたものとして、以下の十八部四十七卷を提示している。

- | | | | | | | | | |
|------|---------|----|------|-------|----|------|--------|-----|
| (1) | 大品般若經略疏 | 四卷 | (2) | 法華新撰疏 | 六卷 | (3) | 法華玄談 | 一卷 |
| (4) | 法華科文 | 一卷 | (5) | 觀音玄讚 | 一卷 | (6) | 涅槃義疏 | 二十卷 |
| (7) | 仁王略疏 | 一卷 | (8) | 入楞伽義心 | 一卷 | (9) | 淨飯王經疏 | 一卷 |
| (10) | 孟蘭盆經疏 | 一卷 | (11) | 三論略章 | 三卷 | (12) | 三論序疏 | 一卷 |
| (13) | 中論遊意 | 一卷 | (14) | 中論玄義 | 一卷 | (15) | 中論略疏 | 一卷 |
| (16) | 十二門論略疏 | 一卷 | (17) | 八科章 | 一卷 | (18) | 龍樹提婆傳疏 | 一卷 |

しかし、平井俊榮¹⁹は奈良朝現在錄、安遠錄、永超錄、義天錄等に基づいて、大品般若經略疏、法華新撰疏、涅槃義疏、孟蘭盆經疏、三論略章、三論序疏、中論玄義、十二門論略疏などの八種や華嚴疏二十卷、無量義經統略、中邊分別論疏四卷（以上奈良朝現在錄）、涅槃經疏十四卷なども追加した。また、『中論玄義』と『三論玄義』とは同じものであり、一部の人はそれが現存していると見なしている。

これらの著述を通じて、吉藏は法華經の成立と傳來の來歴に対して段階的に整理しており、その思想的背景には三論學があるのである。

具体的に彼が法華經を解釈するため、講經のもとにしたのは①僧叡と道朗の舊宗、②龍樹、提婆の通經大意、③法華論である。これに関して、里見泰穩は梁の三大法師である光宅法雲、開善智藏、莊嚴僧旻のような江南佛教の學風を批判するためのものであったと述べた。²⁰特に、彼の著述で現れる經典に対する思想的觀點を検討してみると、すべての大乗經典は同じ価値があると見なしていることが分かる。それぞれの經典が個別の主題に相応しているため、優劣の観点で比較することは意味がなく、それぞれ説する方法が異なり、持っている相対的価値も異なる。

四 『法華遊意』の體制と特徴

1. 體制と内容

『法華遊意』の形式的特徴は十という数によって議論を整理しようとしたこととかわりがある。つまり、この本は形式的に十章に分けており、各章もまた十という区分で分割しようとした意図が全体的に見える。そのため、内容による分類より、過度に形式的な分類になる可能性があることに対する指摘もある。²¹

1) 第一章 大意門（來意門）

「來意」とは經や品などが存在する意義を意味するものであり、「欲説……故說是經」のような形式で法華經がどのような思想を語って

18 妙法蓮華經優婆提舍（法華論）、天親造・菩提留支譯

19 平井俊榮、中國般若思想史研究、pp.382-383

20 里見泰穩、吉藏の法華經解釋について、印度學佛敎學研究、第十二卷 一號（一九六四）p.148

21 菅野博史、中國法華思想の研究（東京：春秋社、一九九四）p.299

いるのかを説明しており、これを通じて吉藏の思想的法華經觀を見ることが出来る重要な部分である。つまり、法華經に対する吉藏の立場を全体的に示している部分である。

2) 第二章 旨歸門（宗旨門）

ここでは因果論に基づいて法華經の根本的な宗旨について述べている。

3) 第三章 釋名題門

「釋名題」とは、題名としての妙法蓮華經の意味を解釈するものである。たとえ經名が内容の全體を反影しているのではないが、中國などの漢字文化圏では傳統的に經題を一字ずつ区分して検討しており、それに基づいて解釋を行い、經典が内包している思想を把握してきた。すでにこのような方法は、道生の『妙法蓮華經疏』をはじめ、智顛や灌頂などによって「釋名」という分科名の領域にも表れていた。したがって、この章の「釋名題門」も吉藏の法華經に対する思想觀を概括的に示したものとと言える。

4) 第四章 辨教意門

ここでは法華經の教判学的な位相について説明している。

5) 第五章 顯密門

この章は、聲門と菩薩に対する教化の態度を「顯（顯露）」と「密（秘密）」に分けて釋尊の教化を四門としてまとめたものである。この顯密の四門は一種の教判思想であり、この本で完成された。これを法華經と般若經との比較を通じてまとめた。

6) 第六章 三一門

この章では、法華經方便品の中心思想である三乘と一乘について説明している。

7) 第七章 功用門

ここでは、法華經の偉大な救済力について十個の不可思議で祥瑞な事を通じて語っている。

8) 第八章 弘經門

ここでは、法華經を弘通する方法と法華の三軌、法師について説明している。その内容は『法華玄論』卷一の「弘經方法」の中の「初釋法師義」の内容と密接な関係がある。

9) 第九章 部黨門

この章では、法華經の多様な解釋と翻譯の歴史について説明している。

10) 第十章 緣起門

この章は、法華經講義の歴史を整理し収録したものである。

2. 『法華遊意』の内容構成

上で述べた十門の内容敘述を簡略に大義だけ選んで整理すると、次の通りであり、彼の主要思想である二藏三種法輪、三攝法門、顯密門教判、五雙十教、兩車論（三車四車）、弘法三軌、十種法師、十種不可思議などが含まれており、その背景になるのは般若や無得正觀などの空思想である。

現在まで知られている『法華遊意』の版本において、十門に相当する標目の表記の場合、少し異なることもあるが、その内容は同じであり、これを再び細分し説明すると、大抵以下の通りである。

開題序

第一章 大意門

綱要十門

- 1) 諸菩薩の行
- 2) 梵王の請
- 3) 十方三世諸佛の權實
- 4) 三淨の法門
- 5) 五戒十善淨於三塗 (2) 二乘以淨三界 (3) 明一道以淨二乘
三攝の法門
- (1) 攝邪歸正門
- ① 在家起愛衆生 ② 出家諸見外道
- (2) 攝異歸同門
- (3) 攝因歸果門
- 6) 三種の法輪
- (1) 根本法輪 (2) 枝末法輪 (3) 攝末歸本法輪
- 7) 聲門と菩薩の二種の疑問
- (1) 釋聲二種疑
- ① 舊疑 — 欲以問世尊爲失爲不失四十餘年常懷此疑
- ② 新疑 — 初聞佛所說心中大驚疑

(2) 菩薩二種舊疑

- ① 舊疑 — 昔稟三乘之…或疑退墮二乘地
 - ② 今疑 — 疑佛所說…今辨有一昔不應說三
 - 8) 中道の法…中道即妙法中道即妙法蓮華經
 - 9) 諸菩薩の念佛三昧…斯即徑輪大宗必須依斯禮念也
 - 10) 罪福の果報…爲現在未來十方衆生如實分別罪福果報 —
- 此經即說實理故信之福多毀咎之罪重（一舊疏本名說經因緣甚廣今略明十門也）

第二章 旨歸門

言宗體一者共在會稽撰釋法華宗旨凡有十三家今略明即世盛行有其三說

- 1) 宗と體…一云以萬善之因爲此經宗 批判
- 2) 先師の三說…二者有人言此經以果爲宗 批判
 - (1) 万善の因 (2) 果徳 (3) 一乘の因果
- 3) 破・取の四句…三人此經具以一乘因果爲宗 批判
 - (1) 破而不取 (2) 取而不破 (3) 亦取亦破 (4) 不取不破

第三章

釋名題門

釋經題目更開七門

- 1) 立名意門 — 涅槃即是法華之異名…經名を樹立した意味
- 2) 立名不同門 — 有五雙十義…經名を樹立した理由は同じではない
- 3) 轉不轉門 — 名字古今不轉…經名の變化與否

22 吉藏述、車次錫、남은 共編譯、『譯註法華遊意』(서울:우리出版社、二〇一七) pp.37-39。この内容をもとにし、各研究者の説明を追加した。

— 隨佛出世名字改易

4) 具義多小門…意味を備えるのにおける多少の差異

— 一義立名

— 二義立名

— 三義標名

5) 前後門…經典翻譯以前と以後の題目の有無

6) 翻譯門…翻譯者によつて經典の題目が変わる理由

7) 釋名門 — 七軸宗歸一乘…經典の題目の説明

第四章 辨教意門

1) 一教 — 一乘教

2) 二教 — (1) 大乘 (2) 小乘

3) 三教 — (1) 根本法輪 (2) 枝末法輪 (3) 攝末歸本法輪

4) 四教 — (1) 人天乘調柔 (2) 二乘調柔 (3) 自教調柔 (4) 他教調柔

5) 十教 — 五雙十教 (1) 頓教 (2) 漸教 (3) 他教 (4) 自教 (5) 出世間教

第五章 顯密門

1) 諸經論の顯密…通就諸徑輪明顯密

(1) 一化の四門

(2) 傍正の四門

2) 小品と法華の顯密…別舉小品對法華輪顯密

(1) 秘密と非秘密

(2) 法華と波若の優劣

- (3) 法華は波若の異名
- 3) 法花の顯密…就法華內自論顯密
- 4) 顯密の料簡

第六章 三一門

- 1) 開三顯一
- 2) 會三歸一
- 3) 廢三立一
- 4) 破三明一
- 5) 覆三明一
- 6) 三前辨一
- 7) 三申明一
- 8) 三後辨一
- 9) 絕三明一
- 10) 無三辨一

第七章 功用門

- 十事（十種不可思議）
- 1) 三事斗 十事
- 2) 十事
 - (1) 化主不可思議
 - (2) 徒衆不可思議
 - (3) 國土不可思議
 - (4) 教門不可思議
 - (5) 時節不可思議
 - (6) 神力不可思議
 - (7) 利益不可思議
 - (8) 功德不可思議
 - (9) 乘權乘實不可思議
 - (10) 身權身實不可思議

第八章 弘經門

弘經方法

- 1) 弘法三法（總說）
- 2) 弘法三法（各說）
 - (1) 入如來室
 - (2) 著如來衣
 - (3) 坐如來坐
 - (4) 法師三事
- 3) 十種法師

- | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|------|---------|
| (1) | 解行法師 | (2) | 福慧法師 | (3) | 難壞法師 | (4) | 雄勇法師 | (5) | 道行法師 |
| (6) | 誠諦法師 | (7) | 無諍法師 | (8) | 具足法師 | (9) | 無著法師 | (10) | 菩薩摩訶薩法師 |

第九章 部黨門 明部黨不同

- 1) 正法花 2) 妙法蓮花

第十章 緣起門 明講經原由

吉藏の法華經註釋書の中で「開題序」があるのは『法華遊意』であり、その序で吉藏の法華經觀と經題釋が要約されている。この經典の名稱である「妙法蓮華經」は七軸の形式中で「義」は開方便門と顯眞實義に分かれており、開方便門もまた二種の方便に分けられる。そして、顯眞實義も二種の眞實を示す。これに続いて、序では方便を「麤」と、眞實を「妙」と命名しており、乘の權實に関しては、「この一を持つてきて三を破し三が除去されると、一さえも捨てる」と述べている。

ここでは妙法蓮華經の題目が持っている意味を説明しており、「妙」字は理が言語を超越しているためであり、「法」はすべての衆生のために規範を作成するためであり、蓮花は深奥な道を蓮花の形像を借りて譬喩するからだと説明している。

本文の第一章大意門すなわち來意門の題目の下で、再び十區分し仏が妙法蓮華經を説する内容の中で中道の法を説しようとする目的であることを明らかにしている。吉藏は法華經の中道を説明するために法説、譬説、因緣説という三周說法の科文を利用しており、また、別途に序品から法師品まで、初周や寶塔品から囑累品まで第二周とした。初周では一道清淨を明らかにしており、それは中道にあり、また第二周では一法身を明らかにしており、それもまた中道にあるため、法身は無二にあるものであり、この二つの周は、すべて中道を明らかにするためのものである。

3. 関連註釋書と引用文献

吉藏が著述した約二十個の著作の中で『法華遊意』一卷をはじめ、『法華統略』六卷、『法華玄論』十卷、『法華義疏』十二卷等は法華經に対する註釋であり、日本の明治三十八年に完成した卍字藏に所蔵されている。²³ その中で『法華玄論』十卷と『法華義疏』十二卷の研究成果を集約しその精髓を簡潔に整理したものが『法華遊意』であると言える。

『法華遊意』では「開題序」の後ろに法華經の「玄」について十門に分けて明かしている。まず、「開題序」では法華經の中心思想が「乗（教法）」の方便と「身（佛身）」の方便のための方便であることを理解すること、乗と身の眞實を表そうとしている。

一方、吉藏が『法華遊意』を十門に分けて法華經の注釋と説明を整理しながら引用している經典の中で一番多いのは『智度論』であり、その次は『涅槃經』などの十種類がある。そして、註釋書としては『法華論釋』や『法華疏釋』等を引用した。

- | | | | | | |
|------|------------------|------|---------|------|-----------|
| (1) | 智度論 | (2) | 智度論釋 | (3) | 大智度論 |
| (4) | 涅槃經 | (5) | 七卷 金光明經 | (6) | 勝鬘經 |
| (7) | 方等經 | (8) | 大雲經 | (9) | 悲花經 |
| (10) | 攝大乘論 | (11) | 金剛波若論 | (12) | 淨名經 |
| (13) | 中論 ²⁴ | (14) | 大論(第百卷) | (15) | 法雲經 |
| (16) | 大集經 | (17) | 地持論 | (18) | 仁王經 |
| (19) | 華嚴經 | (20) | 法華論釋 | (21) | 法華疏釋 |
| (22) | 法華經疏 | (23) | 文殊師利經 | (24) | 維摩詰不思議解脫經 |
| (25) | 僧鬘師子吼一乘方便經 | (26) | 淨名玄義 | (27) | 百論 |

23 蔡運辰 編著、二十五種藏經目錄對照考釋(臺北:新文豐出版公司、一九八二) p.197
24 正觀論とも呼ばれる。

このように、經典名あるいは書名を明確に表記したものもあるが、經名を表記せず、その内容だけを引用し説明したものも多い。それには妙法蓮華經優婆提舍、佛藏經、小品般若經、文殊師利問經、楞伽經、提謂經、即時非時經、枯樹經等がある。

参考として言うと、平井俊榮は吉藏の著述の中で法華玄論と淨名玄論に引用されている各經論の引用回数、著者などを整理し検討した。特に、涅槃經と智度論が引用されている形態と特徴に対して集中的に分析した。²⁵

五 法華經の成立と『法華遊意』の版本

1. 法華經と翻譯書の成立

ここでは、法華經の翻譯書が成立した過程と傳來について、『法華遊意』に書かれている内容を中心に整理した。

『法華遊意』では經典に内包された思想は言うまでもなく、經典が初めて翻譯された來歴と他の書名で伝われるものについても体系的に整理している。特に、第九章の部黨門で扱っている内容の中で題目の「部」は、天台宗において釋尊の教えを時期に合わせて順番を決めていることを意味し、「黨」は集團別の論辨を言うものであり、その章では二つの違いについて説明している。

1) 正法華經

ここでは、「法華遊意」の内容の中で版本の成立に関して詳しく説明している。つまり、この經典には二つの版本があり、舊本は正法華經であり、燉煌の月支國沙門である竺法護が西晉の武帝太康七年（二八六）に翻譯し、その後、クチャ国の出身の帛元信の校正によって二九一年完成された。これに対しては、太康十年（二八九）八月十日法華經二十七品を翻譯したという他の説もある。これを優婆塞であ

る聶承遠²⁶に渡し九月二日に終え、張士明と張仲政が一緒に受け取って記録した。

元々、この經は十卷二十七品で構成されており、思想的に眞實な教理は一乗教理一つだけであり、この教理を信じると、誰も仏になることができる」と説法している。道安竺法太のような人はこの本を略稱し晉本とも言う。

この翻訳本に対して、梵本は薩達摩分陀利修多羅と言ひ、竺法護は正しいという意味で「正」と翻訳したため、正法華經と呼ぶ。また鳩摩羅什は「薩」を「妙」と翻訳した。

2) 妙法蓮花經

正法華經とは異なる版本である新本は鳩摩羅什が翻訳した妙法蓮花經であり、魏秦（後秦）姚興弘始十年（四〇八）二月六日に長安の大寺で翻訳が完成された。これに対しても、弘始五年四月二十三日に長安の逍遙園で翻訳されたという異説がある。これに対して詳しい説明を加えると、鳩摩羅什が長安に到着したのは弘始三年（四〇一）二月二十日であり、翌年四〇二年一月五日に翻訳を始めた。以後四〇六年八月二十日に涅槃に入ったと云われている。

このような時間的な設定にする場合、彼が十年間法華經を翻訳したということは誤謬である。そして、東晉の安帝の時期（三九七―四一八）の場合、慧觀法師によると、弘始八年（四〇六）に、全国にある二千人の義學沙門たちと一緒にこの經典を翻訳したと話しており、僧叡法師は当時この經典を聞いて悟った僧侶が八百名であったと述べた。この翻訳に対する評価においてはいくつかの意譯があるが、文章が流麗であり韻律がよく合っており、他の經典に比べて内容が楽しくてわかりやすいと云われている。

しかし、この經の翻訳に関しては三つの説があり、一つ目は、四〇六年長安大寺で翻訳した説であり、二番目は、四〇五年正月草堂寺で翻訳した説であり、最後は、四〇八年二月六日に長安大寺で翻訳したという本研究の対象になる『法華遊意』で言及している説である。

この翻譯本が出てから百年ぐらい過ぎて中國に來た天竺の僧侶の菩提留支と勒那摩提が世親の法華論を漢譯しており、その時期から鳩摩羅什本での佛性に対する註釋においては佛知見を開示悟入することを従っており、それを通じてこの翻譯本が主に流通されたと見なす

25 平井俊榮、中國般若思想史研究・吉藏と三論學派、pp.515-550

26 西進時代の偉業であり、生没日は不明であり、息子である攝道眞とともに竺法護が翻訳に参加した。

ことができる。

3) 法華三昧經

これは魏の甘露元年（二五六）に交州²⁷で胡僧枝𦵑が六卷に翻訳した本である。現在は残っていないが、吉藏が生きていた当時一卷だけが伝わっていたと述べたのは、四二七年智嚴が翻訳した佛說法華三昧經一冊を言及したことである。

4) 方等法華經

この翻譯本は晉の太康元年（二八〇）沙門支道良が五卷に抄譯したものである。すでに吉藏が生きていた當時にも、この本は残っていないといわれた。

5) 薩曇分陀利經（妙法蓮華經を梵語で音譯したもの）

この冊の分量は一卷であり、吉藏によると、當時經典の目錄を探してみると、晉の前後に当てはまるといふ。過去江の右側が西晉であり、元王の時期江を渡って左に至っており、そこを東晉と呼んだ。晉の安帝の時期である義熙（四〇五―四一八）年に經典が江を渡って伝わると記録されている。

この經典の翻譯者は未詳であり、異教徒である提婆達多と龍王の娘がこの經典を信じその功德のお陰で仏になったと説法を行った。

6) 添品法華經

上で述べたの翻訳は、『法華遊意』で吉藏が言及した異譯本であり、この外に現在まで伝わっている翻譯本の中で吉藏の以後に翻訳されたものとしては、隋代七世紀初印度出身の闍那堀多と達摩笈多がともに梵本を校勘し、以前の二つの翻譯本を比較、添價し翻譯した添品法華經（六〇一）がある。この經典は總七卷二十七品で構成されており、現存する梵文本と内容が最も似ており、一乗教理の内容と永遠なる仏の存在に依持しこの經の教理さえ通達すれば、過去の罪過に関係なく、誰も仏になることができると説いている。内容の特徴とし

ては、正法華經、妙法蓮華經に普門品偈頌を追加したことや、妙法蓮華經の藥王菩薩品の後に日光喻の全文を補充したこと、正法華經のように提婆達多品を寶塔品内に合したことなどがある。また摠持品と陀羅尼品を信力品の次に位置させた点も特徴としてあげられる。

一方、法華經の成立史という観点から見ると、この經を結集した大乘佛教教團は印度の佛塔信者團の中の二つ（ガーナ、bodhisattva-gana）であり、以後その内容が一類（紀元五〇年）、二類（一〇〇年）、三類（一五〇年）を経て増廣されたことは、原典を研究した先行研究で明らかになっている。

現在に伝わっている梵本には、ネパール本（完本）、西域本（部分）、ギルキット本（部分）の三種類があり、チベット譯本と、六種類の漢譯の版本の中で三種が現在まで伝わっている。この中で、ネパール本は十一―十二世紀の筆寫本であり、悉曇文字とナーガリー文字で書かれており、西域本は、中央アジアを探險してえたサンスクリット語原典の斷片を集めたものであり、ギルキット本は五―六世紀の筆寫本であり、直立クツプタ文字で書かかれている。

2. 『法華遊意』の版本

1) 龍谷大學 木版本『法華遊意』二卷 一冊

卷首題面の著者表示は、胡吉藏撰

廣令流布 一乘教理 普爲弘通 三論宗義 敬開

一卷遊意 欲傳諸方 道俗 願以此功德 久護持

正法六趣衆生 皆發大心 三界羣類 悉到覺岸

焉 于時 建長四年 壬子 十月 七日

東大寺 戒壇院 沙門 聖守 謹題

木記…元祿四（辛未、一六九二）歳六月中院日 / 村上平樂寺 重梓

卷末…圖（吉藏坐像？）

牌記…無上甚深微妙法 百千萬劫難遭遇 / 我今見聞得受持 願解如來眞實義

2) 善通寺 木版本『法華遊意』二卷 二冊

この版本は、上の龍谷大學のものと同じように版本であり、サイズは二六・三×一八・〇cmであり、表紙には四針眼の装訂と題籤に「法華遊意、上」という木板印刷された題籤題があり、右上段には「善」、下段には「善通寺」という墨書の所藏者の表示がある。表紙内側の面紙には「善通寺藏」という木板印刷の所藏表示が刻み付けられており、初めの張には吉藏であると推定されている坐像の人物木版畫がある。これらの版畫は同じものであり、上の龍谷大學の場合、卷末に位置していたものが編綴する時移動したと見られる。その裏、すなわち卷首題の始作の前にも、上の版本のような牌記が配列されている。

この冊の板式は次の通りである。

木版本 二卷 二冊、四周單邊、無界、十行 二十字

版心…上白口、下大黒口、上下向黒魚尾、下内向二葉花紋黒魚尾

花口題…法華遊意

全体の分量は、上巻が三十八張、下巻が二十三張であり、卷末には龍谷大學のものと同じように「廣令流布一乘教理…東大寺戒壇院沙門聖守謹題 / 木記…元祿四（辛未、一六九二）歳六月中院日」までは同じ内容である。続いて最後の張には「皇都書肆五車樓藏版略書目〔京都〕菱屋孫兵衛」という記録と刊行書目が収録されている。

形態上で特記する事項としては、版心部分から上下の魚尾までが全体の下部三分の一に位置しており、上は黒魚尾であり下の魚尾は二

葉の花紋魚尾であり、版口の上には題目がある花口であり、下の版口は大黒口であることがあげられる。張次は上下魚尾の中央に表示されている。

本文の配列で行別の文字の位置と順序は仁和寺本と同じであるが、一面が七行（仁和寺本）と十行であることは異なる点である。行中には、左右に句讀点の表示と訓讀の懸吐を印刷しており、冊の前部には本文の欄上餘白に説明の注と引用根據、科文形式の内容に対する簡単な圖式とその内容を筆寫で付記しているが、第八張以降は墨書がない。また、本文の行間の内にも年號等の補充説明が板刻されている。

文字の書體が印書體に変わったが、この研究の對象である身延文庫本と比較すると、全体の内容は同じである。ただ身延文庫の場合、「法華、法花」が混用されているが、ここでは「法華」で統一されている。

3) 眞福寺 寫本 『法華經遊意』 一冊

大須文庫

永仁三年（一二九五）三月二十八日

永仁三年三月廿八日 傳領之畢、三論宗 沙門 聖然

表紙書名は「法華遊意」、卷首題は「法華遊意疏」、卷末題は「法華玄遊意疏」であり、別々に表記したのである。

4) 高山寺 寫本 『法華經遊意』

卷子本

卷末題 法花經遊意 一卷、胡吉法師造

筆寫記 承保四年五月八日 書寫下 醍醐寺（一）

本文の場合、上下の邊欄と界線が描かれ、一行に二十一―二十二字が書かれている。そして、後で読みながら角筆を表示した部分がある。この冊は平安時代の承保四年（一〇七七）に卷子本として筆寫されたものであり、卷末の筆寫記録によって醍醐寺と関係があるものと推定される。山口佳紀の解題²⁸説明によれば、本文中には、朱色訓点とヲコト点は東大寺点で表示されており、その時期は本文書寫と同じ時期であるという。また、前半部に表示されている角筆による訓點も朱點と同じ時期であり、高山寺には、別の角筆文獻もあるが、その中で最も古いものの一つであるという。

5) 寶壽院 寫本『法華遊意』

この冊は大正藏の比較本であり、版本は鎌倉時代の寫本であると推定されている。著者表示は「胡吉藏造」であり、他の版本すなわち仁和寺の藏本では「撰」と書かれており、その点が異なる。そして、大正藏では仁和寺版本との比較と校勘内容を注で明らかにしている。

6) 仁和寺 木版本『法華遊意』

本研究の對象版本である身延文庫本のような版本であるが、大正藏で引用している底本は部分的に散逸された部分がある冊である。ただし本研究の對象本の場合、内容においては散逸がない版本であるが、時間が過ぎて卷末の張次順序の一部が混ざってしまった。

すなわち、この冊は、上の寶壽院寫本とともに大正藏の比較本として使用されており、版本は建長四年（一二五二）に聖宇が刊行したもので仁和寺に所藏されている。この仁和寺本の場合、全文が完全に伝わっていないため、前の部分の一部である「一大意門」の中の場合、「於佛智慧……豈可守一而失三用也」までの五六九字が脱落されている。また、同じ「一大意門」の中間ぐらいにも「斯經既融會一化則」具足三門……亦命得聞是經〔入於佛慧〕の五六一字が脱落されている。これは、各一張、すなわち四面の印刷部分二張が落張されたものと推定される。そして、卷末部分においても「晉安帝時」の後の内容は無い。

六 身延文庫本『法華遊意』の原文対照と特徴

ここでは、身延文庫本『法華遊意』の内容について校勘の次元で大正藏の内容と比較してみた。もちろん大正藏の比較対象も身延文庫本と同じようないわゆる仁和寺本であるが、前で言及したように、仁和寺本の場合、本文中に落張があるなど、他の版本によって校勘された部分が多いため、大正藏の内容の中で逸失した部分として補完された部分に対する再確認と、比較的早い時期の單卷形態版本を対照することが原形を把握するのに役に立つと判断される。

版本の校勘において一般的に表示される現像で文字あるいは文章の「誤、脱、衍、訛、倒」や、異體字、俗字などを見ることができ、比較の対象においても同じ現像が確認される。

特に基本的に編卷を変えて上下の二冊に割ったものを含め、版本によっては本文中の一部が逸失したり、文章の重複を意圖的に省略をしたりした部分も少なくない。

一部の版本の場合、研究の対象本と行、字の位置と順序も同じであるが、本文の文字の中で「花、華」が混用されたことを「華」で一したり、古字や異體字を直し通用の正字體に変えたりしたものも少なくない。

これらの現像を個別字単位で逐字的対照をすると、大抵次のような傾向がある。

1. 文字の異同・誤脱・倒置・省略

- 1) 異字同意…云↕言、密↕蜜、卽↕則、此↕是、慧↕惠、花↕華、歎↕嘆、尋↕礙
辨↕弁、不↕未、非、也↕耶、乎↕哉、兼↕並、苑↕菀、園、前↕先、吉↕好

賜↕與、顯↕現

このような現状は版本の系統差異と底本間の傳承過程によつて作られたと思われる。

2) 略字、俗字…體↕體、躰、躰、稱↕秤、着↕著、最↕最、珍↕玠、閉↕閉、無↕无、爾↕尔

萬↕万、明↕明、色↕色、匱↕厭↕厭

3) 單語…「般若↕波若」の場合、特定部分で般若と波若が集中的に現れる。

4) 固有名詞の異表記…芬陁利↕分陁利

5) 倒置…散發的に確認される。

* 例示 (一四―一―四) …四句三句↕三句四句

(一六―三―二) …名之爲↕名爲之

(二三―三―四、六) …此經正弁↕此經弁正、正因佛性↕佛性正因
是即↕即是、内外↕内外

6) 誤字…文字形態の類似性による誤刻

(二〇―三―六) 佛不得滅也↕便不得滅也 (佛↕便〇)

(三一―一―四) 夫明一化↕大明一化 (夫↕大〇)

(三二―三―一) 故知昨小乘教↕故知明小乘教 (昨〇↕明)

2. 文章の脱文・衍文と異體字

ここでは、対象本と大正藏の脚注で提示された對校部分を除いて本文の差異だけを整理しており、その結果は次の通りである。位置の表記は張―面―行の順序で示した。全體的な文章構成と配列において終結辭である「也」字の省略が多く、「耶」、「卽」、「是」、「者」、「之」、「等」字などの虚辭や指示語が省略されたり、追加されたりしている事例があり、上に書いた内容と同じように、重複される單語の接尾辭が反復される場合にも省略する場合が多く見られる。

1) 前の文章の單語が内容上で重複に使用されることを避けるために、次の文章で省略した場合もいくつかはある。

*例示 (二七―四―二) ……實相斷諸煩惱 故法身現 ↓ ……實相斷諸煩惱 斷諸煩惱 故法身現

2) (二九―四―一、七)、(二〇―一―一、二) のように印刷状態が良くなって文字を判讀できない場合には、墨書でその文字の左右に正文を補記した。

3) 文章の表現上省略しても意味の伝達に大きな差異が出ない場合にも省略がある。

*例示 (二四―二―六) 終佛成佛 ↓ 不得成佛

4) 意味を具體化するために文字が追加された場合もある。

*例示 (二四―三―五) 能究竟諸法 ↓ 能究竟盡諸法

上のような文章の中での位置や追加だけでなく、古字、略字を始め、異體字の使用もよく見られる。

1) 部首の形態・文字の左部の「弓」の代わりに「方」字を使用した。(弘↕弘)

2) 舉絶↕絶亦明↕明

特に対象本の場合、巻末の第九門の最後の文章の後から第十門が始まるまで、五十二字が省略されている。

晉有前後 昔有江右名爲西晉 此經猶居外國 自從無王渡江 左稱爲東晉

至晉安帝 義熙中 此經始度然 此經度江將三百年矣

この部分は、翻譯本の傳來の事実とその過程を示す部分である。このほかに、この研究の対象本の場合、いくつかの場所で脱文が確認される。しかし、すでに大正藏で校勘された内容を収録しているため、ここでは省略し大體的な校勘の傾向を比較するのにとどまった。ただし、このような差異は、中國からの傳來過程で生じた誤寫の問題であるのか、あるいは、異なる版本の傳承過程で起きた問題なのかは判断しにくい。ただ單語、文章の連結、脱文、衍文などから見て、お互いに異なる系列の版本が流通されたといえる。

七 結 言

以上のような検討を通じて吉藏が撰述した『法華遊意』の成立と傳來の版本について検討しており、この研究の基礎と背景となる吉藏の生涯と著述も参考にした。

吉藏は、多數の註釋書を撰述したが、特に法華經に関する註釋書が多く、『法華遊意』一卷をはじめ、『法華統略』六卷、『法華玄論』十卷、『法華義疏』十二卷等があり、その中で『法華玄論』と『法華義疏』の内容を集約しその核心を整理したのが『法華遊意』である。

研究の対象本である久遠寺所藏の身延文庫の木版本『法華遊意』は、すでに知られている大正藏の比較本であった仁和寺の本と同じ版本であるが、対照された仁和寺の本の場合、落張が多いため、内容が完全ではない。一方、身延文庫本の場合、卷末の張次順序が入れ替わった部分があるが、順序さえ正しくすれば、内容上には缺失がない。

また、文庫本の場合、粘葉装で製本されており、他の版本と比較して本文中の内容において古字や、異體字などが多く、文章の倒置や省略、衍文等が相存しているため、中國から傳來された底本の版本が異なったり、筆寫および轉寫の過程で變容が起きたりした可能性がある。これらの問題を調べるためには、今後高山寺所藏の一〇七七年寫本『法華經遊意』等との對照が必須的である。

一方、この冊の構成と體制面では、「開題序」の後ろに法華經の「玄」について十門に分け説明している。まず、「開題序」では法華經の中心思想を説明し、その後は大意門、旨歸門、釋名題門、辨教義門、玄密門、三一門、功用門、弘經門、部黨門、緣起門に分けて問答體の形式で説明している。この中の場合、版本によって大意門→來意門、旨歸門→宗旨門の項目名が変わったものが多く、前者は法華經の根本の趣旨、思想、教説を言うものであり、後者は修行と果報という観点から因果論を説明したものであり、内容上には差異がない。

〈参考文献〉

- 菅野博史『南北朝・隋代の中國仏教思想研究』東京…大藏出版 二〇一二
菅野博史『法華とは何か…法華遊意を讀む』東京…春秋社 一九九四
菅野博史『中國法華思想の研究』東京…春秋社 一九九四
金斗鍾『韓國古印刷技術史』서울…探求堂 一九七四
金玄海『法華經要品講義』서울…民族社 一九九六
朴商洙 譯『三論玄義』서울…소명出版 二〇〇九
松森秀幸『唐代天台法華思想の研究…荊溪湛然における天台法華經疏の注釈をめぐる諸問題』京都…法藏館 二〇一六
義天『大覺國師文集』（木板本）
李永子『法華・天台思想研究』서울…東國大學校 出版部 二〇〇二
車次錫・남문근 共同譯『譯註 法華遊意』서울…우리出版社 二〇一七
蔡運辰 編著『二十五種藏經目錄對照考釋』臺北…新文豐出版公司 一九八三

- 坂本幸男 編 『法華經の中國的展開』法華經研究』東京：平樂社書店 一九七二
- 平井俊榮 『中國般若思想史研究』吉藏と三論學派』東京：春秋社 一九七六
- 平井俊榮 『法華玄論の註釋的研究』東京：春秋社 一九八七
- 河村孝照 編 『新纂大日本續藏經』No.五八〇 『法華遊意』卷上・下 東京：國書刊行會 一九七六
- 丸山孝雄 『法華教學研究序説』吉藏における受容と展開』東京：平樂社書店 一九七八
- * (其他個別論文は脚注に代身する)